京都大学大学院教育学研究科紀要 第53号 2007

高等女学校同窓生集団の文化と構造
―京都府立京都第一高等女学校卒業生調査から―

貫　田　優　子

序章

§1 問題設定

女性が学歴によって階層化されるようになったのは，いうまでもなく近代学校教育制度が確立して以降のことである。戦前における女子教育制度の中でも，高等女学校（以下「高女」と略記）は特にミドルクラスの担い手となる女性を育成することを目的として設置された。高女は，当時の在学者の多くにとって最終の学校であることから，女性のアイデンティティの形成にとって重要な役割を果たしていた。高女の同窓会が現在も活発で多様な活動を展開していることはよく知られるとおりである。本稿で着目するのは，まさにこの高女の同窓生集団である。高女同窓生集団の一員であることは，女性にとってなぜ大切であり，またどのような意味をもってきたのだろうか。この問いを通じて，高女が有していた社会的機能を明らかにしていきたい。

同窓生集団という視点から高女にアプローチすることには，2つの意義があると考える。第一に，同窓生集団への関わり方には，卒業生がそれぞれに抱いている母校への思いが強く反映されるものであるため，これによって，高女卒という学歴が持っていた，女性自身にとっての意味が浮き彫りになると考えられるからである。これまでにも教育社会学の分野では，高女卒の学歴が果たした社会的機能については先行研究が蓄積されており，たとえば天野（1985，1987）は，高女卒の学歴が，中流以上の男性と結婚するに相応しい文化をもつ女性であることの指標として機能していたことを指摘し，これによって女性が近代日本の学歴システムの中に組み込まれていった過程を明らかにした。しかしながら，高女卒の学歴は，なにも結婚市場においてのみ有効に働いたわけではない。学歴は，女性自身が自他を評価する上でも重要な尺度であったはずである(1)。高女卒業生たちの同窓生集団への帰属態度を分析することにより，女学校を卒業したことの意味と卒業後長いスパンにわたる機能を内側から捉えなおすことが可能になるのではないだろうか。

高女の同窓生集団に着目するメリットの2点目としては，女学校文化が卒業後に同窓生の文化として結晶化していった過程を追跡できる点が挙げられる。高女には，設立当初よりミドルクラス文化を醸成する役割が期待されていた。とりわけ近代初期の日本においては，欧米諸国のように学校において伝達する文化の母体となる階層が確固たるものとして存在していなかったため，高女という場で新しく生成したハイブリッド―伝統的／近代的／日本的／西欧的―な文化が「結果として新中産階級の『階層文化』になっていった」（広田，1991）のである。女学校文化の実態はすでに先行研究によって次第に明らかにされてきているものの，女学校卒業生が後に形成したであろう「階層文化」に関しては，あくまで女学校の教育カリキュラムや女学生たちの生活記録等を通じて知りうる女学校文化をもとに類推されるにとどまっており（天野　1985，1987，広

田　1991，吉田　2000)，実際に卒業生の手で女学校文化が「階層文化」として展開していく過程については不問に付されてきた。本稿は，卒業後の時間的展開を視野に入れて，女学校文化の特質と機能を捉えなおす試みである。

以上のような問題関心に基づき，本稿では，京都府立京都第一高等女学校（以下「府一」と略記）卒業生データの分析から議論を進めていく。まず，第一章では，女学生たちが学校生活の中で熱心に取り組んでいた事柄から，女学校文化を構成していた3つの要素を文化志向として抽出する。第二章では，女学校卒業生にとっては最も馴染みの深い同窓活動であるクラス会への参加態度を，女学生時代の文化志向から検討する。女学生時代のどのような文化志向がクラス会への求心力として作用し，クラス会における支配的文化となっていくのか。そして第三章では，同窓生集団への帰属の仕方の2つ目の位相として卒業生アイデンティティを取り上げ，第二章で得られた知見をも踏まえた上で，同窓生集団全体の構造を明らかにする。

§2　対象校および調査データの概略

府一卒業生を調査対象とした理由としては，まず，同校が極めて長い歴史をもち，そのエリート性の強さから，他の女学校の模範として存在していた可能性が予想される点が挙げられる。府一の歴史は，1872（明治5）年に華士族の子女を対象として新英学校及女紅場が設立されたときに始まる。1899（明治32）年の高等女学校令を先取りする形で1887（明治20）年には「京都府高等女学校」へ昇格している。1904（明治37）年に2番目の府立高女が新設されたのを始め，京都府内・市内には以後多数の高女が設けられたものの(2)，府一は，明治期以降ほぼコンスタントに皇族の娘が在籍していたことに象徴されるように学生の出身階層面でのエリート性をもっていたことに加え，また入学最難関校として学力面でのエリート性をも有していたため，地域のトップ校として他の女学校の追随を許さなかったのである。

全国的な傾向から見ると，府一はいわゆる新中間層から多くの学生を集めていたことが特徴的である。高女本科の入学者の父兄職業のうち，「公務・自由業」が占める割合は，全国では27.0％にすぎないが，府一では51.3％にものぼる(3)。一方，府一では，農業や鉱工業従事者が全国水準より明らかに低い。教育カリキュラムとしては，文部省が提示した基準よりも，英語や数学に多くの時間が割かれ，女性向けの科目として高女教育に特有だった家事・裁縫のウェイトはやや低めであった。女学生たちの卒業後の進路についても，府一は全国的な水準と比して，進学率が顕著に高く，就職率がやや低いという特徴がみられる(4)。

府一では，同窓生の組織化も早く，高女へ昇格した1887（明治20）年には同窓会である京都鴨沂会（以下「鴨沂会」と略記）が誕生している。鴨沂会は1909（明治42）年に社団法人としての認可を受け，同窓生の懇親のための活動や母校への支援活動のみならず，一般女性に向けた公開教養講座等も盛んに催し，地域の女性文化を指導する啓蒙的役割を担ってきた。府一は第二次世界大戦後の教育改革に伴って1948（昭和23）年に廃校を余儀なくされたものの，鴨沂会は現在にいたるまで盛んな同窓活動を展開してきている。鴨沂会本部では毎年春に通常総会を催し会報を発行し，秋に親睦バザーを開催しているほか，全国には支部が置かれ，それぞれが会合や旅行などのイベントを催している。多くの卒業生にとって最もなじみ深い同窓活動は，学年ごとに毎年開かれているクラス会である。鴨沂会は市内の他の女学校同窓会と比べると，明らかに組織としての基盤が堅固であり，活動も盛んであるため，女学校同窓生集団の文化と構造を見るにあたっ

ては，最適な事例であると考えた。これが，府一を研究対象とした第二の理由である。

使用する調査データは，主に2000（平成10）年7月から9月にかけて実施したアンケート調査と，現在まで実施してきたインタビュー調査である。アンケート調査において対象としたのは，1934（昭和9）年から1943（昭和18）年の間に同校本科を卒業し，各学年が編纂した名簿に掲載されている卒業生全員である。1522人に対して調査票を郵送した結果，853人から回答を得ることができた（回収率56.0%）。調査票は，三つの領域から構成される。まず，女学生時代の過ごし方に関して，回答者たちが女学校生活の中で積極的に取り組んでいた事柄を中心に回顧してもらい，当時の彼女たちの家庭背景（両親の学歴や職業，生活程度など）と合わせて尋ねている。次に，府一卒業後現在にいたるまでの府一同窓生集団への帰属態度についての質問項目群である。同窓活動への参加態度および卒業生としてのアイデンティティ等を尋ねている。最後は，府一卒業後の回答者たちのライフコースに関してであり，府一本科卒業後の進路，就労経験や配偶者の社会的地位などについて質問をした。インタビュー調査はアンケート調査を補足する形で行い，アンケート調査と同様，1934（昭和9）年から1943（昭和18）年までの本科卒業生23名を対象とした。

第1章　女学生時代の文化志向

アンケート回答者たちが，女学校生活にどのような形で適応をしていたのかということについて考えてみたい。調査票では，当時，彼女たちが何に対して熱心に取り組んでいたかを知るため，「学校の勉強」「学校のスポーツ行事」「学校の文化的行事」「部活動（運動部）」「女学校の友達との付き合い」「先生との交流」「読書」「稽古事」の合計8項目に関して，熱心に取り組んでいた度合いを尋ねている。それぞれの分布は表1の通りである。「熱心」「どちらかといえば熱心」を合わせて「熱心に取り組んでいた」ものとみなすならば，勉強では75.0%，学校のスポーツ行事や文化的行事ではそれぞれ61.5%，51.3%，部活動では29.2%，また，先生との交流では25.4%が熱心に取り組んでいたことになる。全体的に女学生たちは順応的で向学校的な傾向を持っていたと考えられる。また，友達付き合いに熱心だった回答者はさらに多く81.6%，学校が提供する教育とは別個に読書や稽古事を行う女学生も少なくなく，それぞれ68.0%，46.0%が熱心に取り組んでいる。

表1　女学生時代に熱心に取り組んでいた事柄(N=853)

	熱心だった	どちらかといえば熱心だった	どちらかといえば熱心でなかった	熱心でなかった	合計
学校の勉強	20.9	54.1	22.6	2.4	100.0
スポーツ行事	20.7	40.8	28.7	9.7	100.0
文化的行事	11.5	39.8	38.5	10.2	100.0
部活動	14.2	15.0	23.6	47.3	100.0
友達付き合い	27.0	54.6	15.8	2.6	100.0
先生との交流	3.8	21.7	43.1	31.5	100.0
読書	28.6	39.4	23.7	8.3	100.0
稽古事	16.2	29.8	27.4	26.5	100.0

（単位：%）

各項目間の構造を検討するため，「4：熱心だった」「3：どちらかといえば熱心だった」「2：どちらかといえば熱心でなかった」「1：熱心でなかった」という方法で回答をスコア化した上で，因子分析を行ったところ，表2のような結

表2 学校生活項目の因子分析（主因子法，バリマックス回転，N=853）

項目	因子Ⅰ	因子Ⅱ	因子Ⅲ
スポーツ行事	0.887	0.140	0.087
部活動（運動部）	0.634	0.016	0.056
勉強	0.075	0.603	0.026
先生との交流	0.251	0.521	0.112
読書	−0.052	0.291	0.140
稽古事	0.048	0.099	0.618
文化的行事	0.411	0.326	0.477
因子寄与率 42.0%			

果であった。ただし，友達付き合いに関しては，本稿で後に分析の対象とする卒業後の同窓生としての交際に直結する項目であり単独項目として扱う必要があるため，また，これを除いた方がより適切な分析結果が得られたため，因子分析の対象からは外している。分析（因子抽出基準は固有値1.0以上）の結果，3因子が抽出された。第一因子は，スポーツ行事，部活動（運動部）の因子負荷量が大きいので，「スポーツ志向」とでも呼ぶことができよう。第二因子は勉強，先生との交流，読書の因子負荷量が大きい。これはフォーマルな学校教育カリキュラムへの適応因子として考えることができるため，「学校型教養志向」と呼ぶ。各々の生徒に委ねられる教養・文化的活動ではあっても，読書は稽古事とは若干性質が異なり学校の勉強との相関がより強く，準学校的な性質をもつ教養・文化的活動であることが分かる。第三因子は稽古事と学校の文化的行事の因子負荷量が大きくなっている。学校外で茶華道・ピアノなどを嗜む女学生たちは，音楽会をはじめとする学校の文化的行事に対して親和性をもっていたといえる。これを「たしなみ教養志向」と呼ぶことにしたい。

これらの文化志向は，女学生たちの家庭的背景との関わりにおいて，異なる性質を帯びている。表3は，上で抽出した3つの因子スコアと，父母の学歴スコア(5)，生活程度スコア(6)の相関係数を表している。

表3 各文化志向スコアと父母学歴・生活程度の相関係数(N=853)

	父学歴スコア	母学歴スコア	生活程度スコア
スポーツ志向スコア	-0.046	0.003	0.029
学校型教養志向スコア	0.025	0.072	0.125
たしなみ教養志向スコア	**0.168**	**0.216**	**0.398**

太字は1%水準で有意な相関を示す

まず，スポーツ志向に関しては，父母学歴との間にも生活程度との間にも相関はほとんど見られず，女学生たちは，それぞれの家庭的背景の相違に関係なく，楽しむことができる領域であったことがうかがえる。学校型教養志向についてもほぼ同様であり，生活程度との間にのみ弱い相関が見られるものの，家庭的背景に左右される度合いは弱かったようである。一方，これらとはきわめて対照的に，家庭的背景と明らかな相関をもつのがたしなみ教養志向である。たしなみ教養志向スコアは，父母学歴，家庭の生活程度の全てと統計的に有意な正の相関が見られる。すなわち，父母学歴や生活程度が高い女学生ほどたしなみ教養への志向度が高くなっているのである。また，父母学歴では，父学歴よりも母学歴の方がたしなみ教養志向の強さに影響を及ぼしていることに注意しておくべきであろう。本稿で扱った調査データの対象者たちの世代がすでに高等女学校第2・第3世代に当たることを踏まえるなら，この世代において既に高等女学校を卒業した母をもつ回答者の家庭は学校文化を媒介としながら独自の文化を紡ぎ出し始めていたものと見ることができよう。そして，世代間で再生産される文化の中心に，たしなみ教養志向すなわち芸術や芸能への嗜好性があったといえるのである。

女学生文化は多面的に構成されており，たしなみ教養志向のように，家庭的背景の影響を受けやすいものがある一方で，学校が提供するフォーマルなカリキュラムである勉強やスポーツ行事・部活は，家庭的背景の差に関わりなく熱心に取り組むことができる領域であったといえよう。

表4 女学校生活への適応と文化志向に関する重回帰分析(N=853)

		従属変数	
		女学生時代は楽しかったか	女学生時代，友達付き合いに熱心だったか
		標準偏回帰係数	標準偏回帰係数
独立変数	スポーツ志向スコア	0.261 **	0.240 **
	学校型教養スコア	0.280 **	0.224 **
	たしなみ型教養スコア	0.123 **	0.142 **
調整済みR^2		0.196	0.156
F値		56.417 **	43.343 **

** p<.01

女学校生活への全体的な適応度と文化志向

の関わりを見るため，女学生時代が全体として楽しかったかどうか，また，友達付き合いに熱心だったかどうかを従属変数とし(7)，これらの文化志向スコアを独立変数に設定した重回帰分析を試みると，前者については学校型教養志向スコア＞スポーツ志向スコア＞たしなみ型教養志向スコアの順に強い作用を受けており，後者についてはスポーツ志向スコア＞学校型教養志向スコア＞たしなみ型教養志向スコアの順に強い作用を受けていることが分かった（表４）。学校型教養志向とスポーツ志向が十分に機能するならば，女学校生活を快い思い出として振り返ることができる，換言すれば，女学校での中心的な教育活動に積極的に携わることができていれば，女学生たちは首尾よく学校生活に適応できていたと言えるだろう。それでは，これらの文化志向は，彼女たちが府一を卒業した後の同窓生としてのあり方に，どのような影響を及ぼすことになったのだろうか。

第２章　女学生時代の文化志向からみたクラス会参加状況

§１　クラス会への参加態度を規定する要因

先に述べたとおり，府一卒業生にとって最も馴染み深い同窓活動とはクラス会への参加である。アンケート回答者の中には，20歳代の頃からクラス会に継続して出席し続けているという人が18.2%ほどいる。彼女たちこそ府一のクラス会さらには広く鴨沂会の活動全般に渡って中心的な立場にあり，府一同窓生集団の文化を形作ってきたものと考えることができるだろう。表５は，20歳代からずっと出席しているかどうか(8)を従属変数に，３つの文化志向スコアおよび府一卒業後に高等教育機関を卒業したかどうか(9)を独立変数として重回帰分析を行った結果である。最も強い作用をしているのはたしなみ教養志向スコア，ついでスポーツ志向スコアであり，学校生活に適応する上で重要な働きをしていた学校型教養志向はここでは機能していないことがわかる。卒業して彼女たちを結ぶ学校という場を失った今，学校の勉強への積極的な取り組みは同窓生集団に向かうための求心力とは成り得ていないのである。また，府一卒業後の高等教育機関進学・卒業もクラス会参加には影響力を持たない。

表5 クラス会に20代の頃から継続して出席しているかどうかを従属変数とした重回帰分析 (N=853)

		標準偏回帰係数
独立変数	スポーツ志向スコア	0.091 *
	学校型教養スコア	0.020
	たしなみ教養スコア	0.125 **
	高等教育機関卒(ダミー	−0.043
調整済みR^2		0.026
F値		5.292 **

** p<.01, *p<.05

スポーツ志向スコアがクラス会参加を促す理由としては，次のように考えることができる。まず，アンケート回答者が在学していた頃の府一では，学校を挙げてスポーツに力が注がれており，スポーツの分野で活躍することが女学生の間で一定の地位を獲得するのに有効だったことである。卒業生を対象としたインタビューによると，全国大会で活躍するバスケットボール部の選手が他の女学生たちの憧れの対象になっていたり，また，校内の一大行事として毎学期行われる「適応遠足」で際立った成果を挙げた女学生にはバッジを与えられ(10)，それを制服につけて登校することが誇りであったなど，スポーツにおける活躍は女学生たちの間で高い評価をもたらすものであった。また，運動部に所属していた人は，クラス会以外にも運動部独自の同窓会を設けて卒業後も親睦を深めたり，OGとして後輩を支援したりする機会を持っており，同窓生や母校とのつながりを維持しやすい立場に置かれていたのである。

では，出身家庭の文化資本によるところの大きいたしなみ教養志向が，卒業後にクラス会参加

への意欲を最も強く支えてきたのはなぜなのだろうか。

§2　卒業後の帰属階層とたしなみ教養志向

まず，たしなみ教養志向が，女学生時代のみならず卒業後の家庭の生活水準とも密接に結びついていることが第一の原因として考えられる。

クラス会はかつてのクラスメートたちが旧交を温めるだけではなく，卒業してから現在に至るまでのライフストーリーや現況を互いに知らせ合う場でもある。当然そこでは，ほかの出席者に対して，より良く自分を見せたいという意識が働く。身に付けるものは勿論のこと，配偶者の社会的地位や業績，子どもの教育達成など，卒業生自身以外のものに自らをアイデンティファイし，これによって互いに競い合い序列化しようとする傾向が強かったのである。たとえば，1939（昭和14）年卒業生は，卒業20周年，30周年，40周年，50周年のクラス会開催に合わせて記念文集を4度編纂してきた。各文集の投稿文を分析すると，家族に触れた記事が全期間を通じて高いのであるが，特に20周年においては家族の社会的地位や学歴に触れている人が63.6%もいる(11)。当時のクラス会が競争的雰囲気に包まれていたことを物語る一つのデータであろう。クラス会では卒業生各人の生活環境の相違や生活水準の格差が浮き彫りになり，このため参加に積極的な人と逡巡する人とに分かれることになったのである。

いいとこのお嬢さんが多かったでしょ？で結婚されてからでも立派な方と結婚されてる方が多いもんで，クラス会というと，（中略）帯締めがどうのとか，指輪がどうのとか，そういうようなことの見せ合いみたいなクラス会だったらしいの，初めはね。そういうこと私ちらっと聞いて，そういうこと大っ嫌いだからね，もう，だからもう府一のクラス会なんか行かへんわって。（Aさんインタビュー，1935年本科卒，のち奈良女高師卒）

卒業し結婚した後の家庭の生活水準を推測するための変数として，ここでは配偶者の学歴を取り上げてみよう。表6をみると，出身階層スコア(12)の高い人は高学歴男性と結婚する場合が多く，結婚後も生活程度がある程度維持されていたことがまずは分かる。さらにここで着目したいのは，たしなみ教養志向の強さが上昇婚を実現していた事実である。たしなみ教養志向スコアが上位であれば，高等教育機関を卒業した男性との結婚率が高まる傾向にあり，特に出身階層スコア下位グループにおいては，たしなみ教養スコア上位者と下位者とでは実に17.9%もの開きがある。このような効果は，スポーツ志向や学校型教養志向には見られない。天野（1985）は，高等女学校卒業の学歴がもつ重要な社会的機能として，高学歴男性の配偶者として相応しい文化を習得したことを表示し，高学歴男性と結婚するためのビザの役割を果したことを指摘しているが，たしなみ教養志向は，このような結婚市場における学歴効果を増幅していたのである。アンケートデータからは各回答者の卒業後の正確な生活水準は知りえないが，女学生時代のたしなみ教養志向の強さが，卒業後の生活水準の高さへと結びつき，それがクラス会への参加しやすさにつながった可能性が大いにある。

表6 出身階層スコア・たしなみ教養スコアと夫学歴(N=853)

出身階層スコア	たしなみ教養スコア	夫学歴				合計
		初等卒	中等卒	高等卒	大卒	
上位	上位	0.0	2.9	15.6	81.5	100.0
	下位	0.0	11.3	15.7	73.0	100.0
下位	上位	4.6	14.9	21.8	58.6	100.0
	下位	6.5	30.9	18.7	43.9	100.0
全体		2.2	13.5	16.8	67.4	100.0

（単位：%）

§3　たしなみ教養志向の機能

たしなみ教養志向がクラス会参加を促す第二の理由として考えられるのは，これが同窓生同士を特に深い絆で結び付ける働きをもっていることだ。さきに，卒業後のクラス会出席への積極性をもたらすものとしてスポーツ志向とたしなみ教養志向とを挙げたが，実はこの2者が卒業後の同窓生としての友情の質に及ぼす効果は若干異なっている。アンケートでは，日頃の府一同窓生との付き合いの性質について，①女学生時代の親友と現在も付き合いがあるか，②現在最も親しくしているのは府一同窓生か，という二つの方向から掘り下げて尋ねてみた。スポーツ志向は，女学生時代の親友と現在もつきあいを維持させる傾向は強くあるものの，現在の親友が府一同窓生であるかどうかについては統計的に有意な影響力を及ぼしていない。これに対して，たしなみ教養志向においては，女学生時代の親友との付き合いを長年維持することに加え，現在の親友として府一同窓生をいわば排他的に選ばせる働きも同時に持っているのである。

「おかしなもので，小学校だって6年間一緒でしたけどね，そういう（府一の同窓生のように：筆者）親しい友達はありません」と述べるBさん（1935年本科卒，のち高等科卒）は，たしなみ教養スコア上位者の1人である。彼女にとって，女学生時代に仲の良かったグループのメンバーは現在においても無二の親友である。このグループのメンバーは，美術作品を好むという共通点をもつため，しばしば一緒に美術館に足を運び，時には遠方まで泊りがけで出掛けることもある。「ツーといえばカーという，話がこうすごくスムースに行きますでしょ。やっぱり好みも一緒ですしね」。女学生時代のたしなみ教養志向の強さは，芸能や芸術への造詣や嗜好性として身体化され，これが卒業後には豊かな趣味活動へと連鎖していく。感受性や関心を共有し合える親近感や信頼感が，同窓生同士の絆をいっそう強めることになったのであろう。すなわち，文化的に近いもの同士を巡り合わせ，生涯にわたって絆を深めるための機会を提供したのが府一という場であったのである。

たしなみ教養志向スコアの上位グループは，クラス会においても趣味や稽古事の話を好んでする特徴があり，スポーツ志向スコアの上位者が，女学生時代の思い出話や健康・体力の話を盛んに行う傾向があるのとは対照的である。女学生時代の思い出話や健康・体力の話が，同年齢かつ同じ学校に学んだ者同士で比較的共有しやすい話題であるのに対して，趣味・稽古事は，日頃特に嗜んでいない卒業生にとっては魅力のない話題であるばかりか，劣等感すら引き起こす。たとえば，Cさん（1939年本科卒）が，以前クラス会に出席したときの出来事である。彼女が偶然腰を下ろしたテーブルは，裕福なクラスメートたちが集まっており，海外旅行や著名な文化人に出会った話題で盛り上がっていた。彼女がその話題についていけず決まり悪い思いをしていたところに，クラスメートの一人が「あんた，このグループと違う」と侮蔑する言葉を投げつけてきたというのである。かつてのクラスメートとの間に大きな亀裂が走った瞬間である。

女学生時代のたしなみ教養志向から派生したハイレベルな趣味文化は，府一卒業生以外の人から自分たちを卓越化して同窓生同士を強く結びつけるのと同時に，府一同窓生内をも分化させながら，同窓生集団の中心的文化となっていったのではないだろうか。

第3章　卒業生としてのアイデンティティと同窓生集団の構造

§1　卒業生としてのアイデンティティを規定する要因

クラス会は，参加もしくは不参加という行動によって同窓生集団への帰属態度を表明する機会

であるが，日常的に心のうちに抱く府一卒業生としてのアイデンティティは意識レベルでの，つまりクラス会参加とは別の位相での同窓生集団への帰属であるといえる。アンケート調査では，回答者たちの卒業生アイデンティティの強さを4段階で尋ねた。これとクラス会出席への積極性（20代から継続してクラス会に出席しているかどうか）との間には統計的に有意な相関が見られるものの，その相関係数は0.135と比較的小さいものでしかない。卒業生としてのアイデンティティを構成する要素は，クラス会参加を促す要因とは若干異なっているのである。

表7は，府一卒業生であることを日頃どの程度意識しているか(13)を従属変数とし，3つの文化志向および高等教育機関も卒業しているかどうかを独立変数として重回帰分析を行った結果である。前章で見たクラス会参加の規定要因とは対照的に，ここでは学校型教養志向が最も強く作用していることが分かる。

表7 卒業生としての意識を日頃どの程度もっているかを従属変数とした重回帰分析 (N=853)

		標準偏回帰係数
独立変数	スポーツ志向スコア	0.111 **
	学校型教養スコア	0.164 **
	たしなみ教養スコア	0.095 **
	高等教育機関卒（ダミー	−0.178 **
調整済みR^2		0.092
F値		18.047 **

** p<.01

序章で述べたように，府一はアカデミックな科目に重点を置き，他の女学校からの卓越化を図っていた。また，校長をはじめとする教師たちは，女学生の中にエリート意識を涵養すべく，しばしば府一のエリート性を明に暗に伝えてきた。

今，府一の教育を振り返り，府一の教育には上に立つ事の出来る人間を育てる教育（帝王学）がありました。先生方の言葉の端々や後姿から私達はそれを学びました。（アンケート自由記述欄，1941年本科卒，のち府一高等科卒）

このメッセージは，授業内外において教師の言動の中に深く刻み込まれており，それゆえ学校のフォーマルなカリキュラムに積極的にコミットしていた女学生ほど，府一の教育を貫くエリート性を深く内面化していったのである。こうして培われたプライドは，卒業した後にも心の支えとなり，自制心や克己心へと姿を変えながら維持され，いっそう強化されていく。

私の現在あるのは京都府立第一高女で素晴らしい教育をして下さったおかげと常に学校先生方（殆んど故人ですが）に感謝しています。5年間の教育のおかげで自分をたのみとしてこれまで生きて来ました。唯感謝のみです。家庭的に複雑で悩みながらも耐えて来られたのもすべて府立第一高女のお陰です。現在も声を大にして当時の鈴木校長の「東洋一の学校」の誇りを謳歌しています。（アンケート自由記述欄，1939年本科卒）

さらに，このような女学生時代の過ごし方以上に，卒業生としての意識の強弱に強い影響力をもつのが，府一卒業後の進学である。府一卒業後に高等教育機関へ進学・卒業した人は，府一以外の学校教育を知ることによって(14)，府一を相対化して眺める機会を得たことが影響し，府一卒業生としてのエリート意識からは脱却しているのである。

五年間，常に『府一の生徒であることを誇りに思え』と教育された。それは大切なことではあるが，高じると，優秀な学校の生徒だというプライドが驕りにもなるのではないかと思い，私は不愉快であった。私は後，府立女専に進学したことにより，府一の教育を批判的に見る目がうまれたと思う（アンケート自由記述欄，1942年本科卒，のち京都府立女専卒）。

§2 府一同窓生集団の構造

第2章で得たたしなみ教養志向の強弱を，同窓生集団の支配的文化からの距離とみなすならば，

前節で検討した卒業生アイデンティティと合わせて検討をすることによって，府一同窓生集団の構造を把握できる。2つの変数をクロスさせて卒業生を4つの類型に分類し（表8）[15]，以下では2番目から4番目のグループを中心に，それぞれの特徴を述べる。

1つ目は，同窓生集団の支配的文化に親和性をもち，さらに府一卒業生としての意識も強いグループである。このグループに属する卒業生はいうまでもなくクラス会の中心人物であり，鴨沂会の活動を牽引してきた人も多く含まれている。

表8 卒業生アイデンティティ・たしなみ教養スコアから見た，クラス会参加と同窓会誌への関心(N=853)

卒業生アイデンティティ	たしなみ教養スコア	最近10年間のクラス会出席					クラス会幹事経験あり	同窓会誌をどの程度読むか				
		ほぼ毎回出席	ときどき気が向いたら出席	ほとんど出席せず	全く出席せず	合計		ほとんどの記事を丹念に読む	興味のある記事だけ丹念に読む	軽く目を通す	ほとんど読まない	合計
強	上位	55.2	25.6	12.8	6.4	100.0	60.8	54.8	34.1	9.5	1.6	100.0
	下位	39.0	36.0	16.0	9.0	100.0	53.2	47.5	34.3	13.1	5.1	100.0
弱	上位	56.0	25.8	10.5	7.7	100.0	63.0	39.3	34.1	22.3	4.3	100.0
	下位	39.5	31.7	11.9	16.9	100.0	51.2	29.8	33.1	30.2	7.0	100.0
全体		47.4	29.4	12.3	10.9	100.0	57.0	40.0	33.8	21.4	4.9	100.0

（単位：%）

府一卒業生としての意識を強くもちながらも，クラス会の支配的な文化には適応しきれないというのが2番目のグループである。彼女たちの場合は，同窓会誌を熱心に読む姿勢からも分かるように同窓会への関心が強いのであるが，クラス会幹事の経験者率が低く，クラス会において中心から少し離れたところに位置する傾向にある。たとえば在学時に校長が繰り返し口にしていた「プライドをもて」という言葉が「背中にしゅうっと入って」おり，卒業後，苦難に出会うたびに心の拠り所にしていたというEさん（1937年本科卒，のち府一補習科卒）は，クラス会には時間的な余裕ができた50代の頃から積極的に参加し始め，近年では常連メンバーである。だが，女学校時代に趣味で結びついていたグループが，現在もやはり共通の趣味をもって親しく楽しげに交友しているのを見ると，女学生時代から現在に至るまで，ひたすら生活に追われてきた自分の人生を振り返ってやるせない気持ちになり，このようなクラスメートの輪の中には入っていきづらいと感じている。クラス会幹事を担当したときにも，表立った仕事は引き受けず，一歩身を引いて会計など裏方の立場に徹してきた。クラス会に積極的に参加しながらも，自ら進んで周辺的な立場に身を置こうとするのである。Eさんは最近，クラスメートとの間に不快な出来事があったためクラス会出席はしばらく控えることにしたのだが，鴨沂会館で上級生・下級生が集って行われる英会話サークルにだけは参加し続けている。母校とのつながりを絶ちきってしまうことは自らの存在価値を証明するものさえ失ってしまうことであると自覚しているのである。

これとは対照的に，府一卒業生としての意識は強くはないが，クラス会の支配的な文化に対しては親和性があるというのが3つ目のグループである。府一卒業後に女専に進学し，さらにデザイナーの仕事に携わることで府一以外の新しい世界を開拓してきた自負をもつFさん（1942年本科卒，のち同志社女専卒）は，府一卒のプライドにすがって生きているクラスメートをやや見下し，「府一魂」を「馬鹿馬鹿しい」と一蹴する。しかしながら，クラス会には30代の頃から出席しており，幹事を買って出たこともあるし，クラス会だけでなく府一卒業生からなる古美術愛好サークルにもすすんで参加してきた。つまり，府一にそれほど強い思い入れは持っていないにも

かかわらず，同窓生集団の中には自然と溶け込み，積極的に関わってきたのである。実際のところ，このグループの人はクラス会の常連や幹事経験率が高い。このグループに属する別の卒業生Gさん（1941年本科卒，のち東京音楽学校卒）は，インタビューの数年前，ピアノ講師としてのキャリアから完全に引退した頃から女学生時代への懐かしさがこみ上げ，府一クラス会へ盛んに足を運び始めた。その根底には府一同窓生とは信頼をもって付き合えるという実感がある。「ちょっとどうなってるんやろうというそんな人はいないし，やっぱりそこのとこ府一の人は学識って言ったらいいかねえ，品位と言うたらいいか，ある一線以上のものはあると思いますね。」

4つ目は，府一卒業生としての意識が希薄で，かつクラス会の支配的文化にも親和性を持たないグループである。このグループは，クラス会出席率が最も低い上，同窓会誌の読み方も他グループと比べるとあまり熱心ではない。Hさん（1941年本科卒，のち東北帝国大学卒）は，府一在学時には学業成績がトップクラスであり，女学校生活は楽しい思い出に満ちているという。しかし，府一時代に音楽の時間が大好きだったにもかかわらず，「家でそれほど習わしてもらえなかったから寂しくもあった」と述懐する。彼女は卒業後，府一同窓生集団とは「肌合いが合わない」と強く感じ，クラス会にあまり参加してこなかった。彼女の言葉には，かつての優等生としてのプライドや，卒業後に高等教育を受けたことからくるプライドとともに，府一同窓生集団をリードする文化に適応しきれずにきた劣等感という両義的な感情が見え隠れするのである。卒業生としての意識も府一同窓生集団の支配的文化との親和性も低いグループであるが，しかしそれでも彼女たちとて府一から完全に独立したアイデンティティを形成しているわけではない。たとえばHさんは，「私それ（府一のエリート意識：筆者）がアホらしいから、あんまり（府一同窓生集団には関わる気がしない：筆者)。まあ私自身が逆に一種のエリート意識があるのかもしれないけどね。」と述べ，あくまで府一同窓生集団との関係性の中に自らを位置づけようとする。すなわち，このグループにおいても，府一同窓生集団は，自己のアイデンティティを構築する際に参照される準拠集団として，機能しているのである。

終章

府一卒業生たちの女学校生活から抽出した3つの文化志向は，卒業後にもその働きを変化させながら機能し，同窓生集団との関わり方を方向付けてきた。まず学校型教養志向すなわち女学校のフォーマルな教育カリキュラムに対するコミットメントの度合いの強さは，府一卒業生としての意識へと姿を変えることになった。府一同窓生集団の一員であるという特権的なエリート意識は，生涯を通じて彼女たちの誇りとなり，アイデンティティの中核を占め続けてきた。しかしながら一方で，実際に同窓生が集う場であるクラス会への参加を促すのは，学校型教養志向よりも，むしろ家庭の文化資本によるところの大きいたしなみ教養志向や，女学校カリキュラムの中では従属的な位置づけにすぎなかったスポーツ志向であった。特にたしなみ教養志向は，無意識のうちに違和感なく同窓生集団に溶け込むことを可能にし，ハビトゥスを共有する者同士として同窓生に強力な一体感をもたらしてきたのである。従来の同窓会研究では，卒業生アイデンティティと，クラス会に参加する行為は連動するものとして捉えられてきたのだが（黄　1998)，この2つはそれぞれ別の要因によって規定されているものと考えられる。すなわち，同窓生集団への帰属の仕方には，卒業生アイデンティティという意識レベルでの帰属と，半無意識の身体レベルで

の帰属という2つの異なる位相があるのではないか。

府一卒業という学歴によって府一卒業生は社会における一定の地位を獲得し，同窓生集団は固有の教養文化に特徴づけられる身分集団として機能してきた。本稿では女学校時代の文化志向の卒業後の働きを分析することによって，同窓生集団の重層的な文化構造も明らかになった。全ての卒業生に共通する教養として同窓生集団の文化の基層をなしているのは，言うまでもなく女学校の教育カリキュラムを通じて伝達された教養であろう。しかし実際に同窓生集団の支配的文化として覇権を握ったのは，女学校時代のたしなみ教養志向から派生した高度な趣味文化であった。学校という共通の場を失った卒業後は，各卒業生の家庭の文化水準が前景化するのであるより高い社会階層に属する卒業生を中軸として構成された支配的文化は，他の卒業生が自らの価値観や行動様式・生活様式を定めるときに追随すべき模範として，あるいは対抗的なアイデンティティをもつ契機として機能してきた。

同窓生集団とは，単に過去の思い出によって結びつき，かつての学校文化を再現するだけにとどまらない。学校文化と家庭文化とが交差し，同窓生同士が相互に交渉しあうプロセスを通じて，独自の集団文化を紡ぎ出してきたのである。

注

(1) 現代の日本社会においても，女性が自分の所属する階層を判断する際に，学歴を重要な基準としてみなしているという。(吉川　2000)

(2) たとえば1931年の時点では，京都市内において府立高女が府一を含めて3校，市立高女が2校，私立高女が8校が存在した。

(3) 府一データについては，1930～36年，1940～42年の入学者データを，府一が父兄に向けて刊行していた『学校より家庭へ』各年度版から算出，また，全国データについては，1929～1938年の入学者データを『文部省年報』各年度版から算出した。

(4) 『全国高等女学校に関する諸調査』各年度版から1929年～1938年の卒業生の進路内訳を算出すると，卒業者中の進学率は全国で23.7%，府一で57.7%，また就職率は全国で8.2%，府一で5.0%である。なおここでの進学先には，高等教育機関に加え，補習科・高等科など高女に附設された教育機関も含まれていると考えられる。

(5) 父学歴は「5：大学，4：高等学校・専門学校・高等師範学校，3：中学校・実業学校・師範学校，2：高等小学校，1：尋常小学校」，母学歴は「4：専門学校・高等師範学校・大学，3：高等女学校・実業学校・師範学校，2：高等小学校，1：尋常小学校」という方法でスコア化した。

(6) 生活程度は，「5：楽だった，4：どちらかといえば楽だった，3：普通，2：どちらかといえば苦しかった，1：苦しかった」という方法でスコア化した。

(7) 女学生時代楽しかったかどうかについては「4：楽しかった，3：どちらかといえば楽しかった，2：どちらかといえば楽しくなかった，1：楽しくなかった」，友達付き合いへの熱心度は「4：熱心だった，3：どちらかといえば熱心だった，2：どちらかといえば熱心でなかった，1：熱心でなかった」という方法でスコア化した。

(8) 20代から70代までの6期間に全てクラス会に出席していた人を1，そうでない人を0として扱った。

(9) 府一本科卒業後に高等教育機関に進学し卒業した人は調査票回答者全体の18.4%を占める。

(10) 適応遠足では，全校生徒が体力に応じて歩行距離の異なる4つの班に分けられる。最長距離コース（40km）である1班に参加した回数によって，金・銀・胴のバッジが与えられた。

(11) この割合は30周年45.8%，40周年26.4%，50周年32.6%と年を追って減少している。

(12) 父学歴スコア・母学歴スコア・生活程度スコアを因子分析にかけたところ1因子性が確認されたので，その因子スコアを階層スコアとして用いた。階層スコア・たしなみ教養スコアともに全体の

平均値を超えている場合をスコア上位者，平均値以下である場合をスコア下位者とした。なお，夫学歴について「高等」と表示したのは，大学以外の高等教育機関である高等学校・専門学校・高等師範学校などの卒業者である。

(13) 日頃，府一卒業生であることを「4：意識している，3：どちらかといえば意識している，2：どちらかといえば意識していない，1：意識していない」という方法でスコア化した。

(14) また，高等教育機関卒業生の中には，職業生活とりわけ教師・医師をはじめとする専門・技術職に長年携わってきた人が多く含まれている(68.2%)ことも見落としてはならない要素であろう。彼女たちは，自分が社会的に高く評価される職業に直結する教育を受けたところは高等教育機関であるという認識のもとに，府一はあくまでも基礎的な教育を受けた場にすぎないと判断していると考えられるからである。

(15) 調査回答者たちの府一卒業生としての意識については全体的に強く，「意識している」「どちらかといえば意識している」を合計すると78.7%にまで達するので，ここでは「意識している」と答えた人（32.6%）のみをアイデンティティが強いグループとした。

引用参考文献

天野正子　1985,「学歴の社会的機能についての一考察－学歴エリートの妻の学歴を事例として－」『広島大学大学教育研究センター大学論集』第14集，19-40頁。

－1987,「婚姻における女性の学歴と社会階層－戦前期日本の場合－」『教育社会学研究』第42集，70-91頁。

Bourdieu, Pierre　1979, *La distinction : Critique sociale du judgement,* Paris(＝1990，石井洋二郎訳『ディスタンクシオン－社会的判断力批判－Ⅰ・Ⅱ』藤原書店).

黄順姫　1998,『日本のエリート高校－学校文化と同窓会の社会史－』世界思想社。

深谷昌志　1966,『良妻賢母主義の教育』黎明書房。

広田照幸　1991,「学校文化と生徒の意識」天野郁夫編『学歴主義の社会史－丹波篠山にみる近代教育と生活世界－』有信堂，136-152頁。

本田和子　1990,『女学生の系譜』青土社。

高等女学校研究会編　1994,『高等女学校の研究－制度的沿革と設立過程－』大空社。

小山静子　1991,『良妻賢母という規範』勁草書房。

吉川徹　2000,「大衆教育社会のなかの階層意識」『日本の階層システム3　戦後日本の教育社会』東京大学出版会，185 - 186頁。

吉田文　2000,「高等女学校と女子学生－西欧モダンと近代日本－」青木保・川本三郎・筒井清忠・御厨貴・山折哲雄編『女の文化』岩波書店，123-140頁。

京都鴨沂会 1972,『母校創立百周年記念誌』。

Vinitzky-Seroussi, Vered 1998, After pomp and circumstance : High School reunion as an autobiographical occasion, Chicago.

（教育社会学講座　博士後期課程3回生）

（受稿2006年9月8日、改稿2006年11月28日、受理2006年12月7日）

The Structure and Culture of Girls' High School Alumnae Group:An Analysis of Kyoto Daiichi Girls' High School Graduates Research Data

NUKITA Yuko

This paper attempts to clarify the feature of a girls' high school culture and its functions in forming an alumnae group after graduation. From the analysis of school day activities(1929--1943), three cultural orientations were found that could be named "studious culture," "sports culture" and "artistic culture." They have importantly influenced how students would belong in different ways to an alumnae group after graduation. Identities as graduates of an elite girls' school consist of several elements, but the most important one is "studious culture orientation." The more actively students took part in a formal curriculum, the stronger their identities as graduates are now. But it has little influence on their joining in class reunions. "Artistic culture orientation" and "sports culture orientation" not at the center of a school curriculum motivate graduates to be present at class reunions. Especially "artistic culture orientation" makes bonds of friendship among alumnae stronger because it gives them a sense of sharing embodied cultural taste. "Artistic culture orientation" is also characteristic of graduates from a higher social strata. Those who have strong "artistic culture orientation" lead the alumnae group whether they have strong identity as graduates or not.